

スタンダードと学力テストによって 学校が壊れる

高野 毅

たかの たけし
1956年神奈川県川崎市に生まれる
執筆時、東京都板橋区立中根橋小学校に
非常勤教員として勤務
[東京民研] 副議長
東京都教職員組合板橋支部書記長

だれのための 授業スタンダード？

二〇一四年三月、板橋区の校長会で、参加した校長に対し、教育長から次のような話が出された。

「今年度、『全国学力テスト』の結果、平均点が二三区中、最下位になった。区では、電子黒板・デジタル教科書も各小学校に導入し、多くの教育予算をつぎ込んできたのに、確たる成果が出ていない。どういうことか」。

これは、本当に学力を測る指標になるのかも分からない「学力テスト」の結果に基づいて、そのテストの平均点を上げるために始められたものと言っている。そもそも、学力テストが導入された意図は、「全国の児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証、改善を図る」(二〇〇七年度 全国学力・学習状況調査要項) ことであつたはずである。国の教育施策を云々するのであれば、毎年行うことも、悉皆で行うことも不要である。また、学力を児童生徒個人に知らせるのであれば、平均点で都道府県・市区町村・学校間で比べることなど問題外である。しかし、吉村大阪市長(当時)は、「成績結果を校長・教員のボーナスや学校予算に反映させる」と発表した。「大阪市の学テの点数が振るわないのは教師の努力が足りないからだ」というのである。この動きは、ますます顕著になろうとしている。今や都道府県・市区町村・各学校が、とてつもない学力信仰(それも平均点競争)に陥り、「学力向上」の方途として、「スタンダード」を現場に強要することに汲々としている。

板橋区は、「二〇一八学び支援プラン」(教育政策集)の重点施策の第一に「学力向上」を掲げた。さらに、

そして、提起(実は強制)されたのが、①各学校で四月早々から「学力向上週間」を設定し、「全国学力テスト」の過去問題に取り組みさせること、②授業の中で、電子黒板の活用を進めること、③授業スタンダードを作成し、どの学校も一定の水準以上の授業を行うこと、というものである。つまり、「授業スタンダード」とは、この「一定の水準以上」の名のもとに、どのクラスに行っても違いがあらわれず、同じように授業を行うことを目指して導入されたものである。

「学力の中核は、読み解く力である。新井紀子氏のRST(リーディングスキルトレーニング)を小中学校全校に実施する」という教育長の鶴の一声によって、二〇一九年度からRSTを実施した。

教育長一人の考えによって、教育行政が、学校教育の内容にまで介入し、その「教育方針」が上意下達で浸透させられる。異を唱える校長が一人もいない。なんと情けない教育界の現状だろうか？

現場では、児童・生徒の不登校や子どもたちの荒れによる授業不成立・学級崩壊、一方でパワハラと多忙化、人手不足に直面している。この現場の実態と矢継ぎ早に出されるかけ離れた教育政策に、多くの教職員から反発の声が上がっている。

授業スタンダードって？

スタンダードとは、ある一定の基準を設けて、生活や学習の面で児童生徒に従わせる「きまり」や「校則」のことである。今、このスタンダードが全国に広がっている。板橋区では、授業スタンダードを次のように定めている。